第1回大同窓会寄稿文

岐阜大学教育学部附属学校同窓会会長
杉山　忠国

岐阜大学附属小学校が創設され本年で65年目、岐阜大学附属中学校が創設され本年で68年目を迎えられました。ここに第1回大同窓会が開催されることを心からお祝い申し上げます。

貴学は「人間教育」を建学の精神として、小学校においては、自主性、社会性、創造性を、中学校においては独歩、信愛、協働を掲げ、一人一人の生徒の個性、能力が十分伸長できるように教育されており、グローバルな人材育成に多大な貢献されて続けております。学校長をはじめとする関係者皆様のご努力と熱意の賜りに敬意を表します。

さて、私たち22期生が卒業してからすでに長い年月が経過していることを思いますと、時が流れるのは早いことを痛感します。この月日の間にも、様々なものが変化し、または変革を迫られてきましたが、我が母校においても母体である大学の法人化に伴い、国の直轄を離れ運営が自由化すると共に、運営費の漸次削減が行われ、その削減分を寄付金等で独自に賄う必要に迫られているようです。また文部科学省の有識者会議においては、国立大学附属学校の存在意義が検討され、今後、国立大学の組織改編と合わせて、国立大学附属校の再編や統合、廃止等の可能性も取り沙汰されております。

このいわゆる母校の存続の危機といった状況において、我々卒業生は何を感じ、何を行動すべきでしょうか。地域において、附属学校の存続の意義を訴えられるのは、附属学校の良さを経験上認識し、地域社会及び地域活動の中で身を以って体現し、必要であると声を大にできる附属学校の卒業生のみです。

第1回大同窓会が契機となり、附属学校を同窓会組織が資金面の援助等、様々な形で支援し続けていければと考えています。

以　上